敦煌禅宗資料分類目録初稿

Ⅱ　禅法・修道論

〔3〕

田　中　良　昭

20　南宗頓教最上大乗摩訶般若波羅蜜経　六祖慧能大師於韶州大梵寺施法壇経

①S.5475　②旅順博物館旧蔵本　③敦煌・任子宜氏所蔵本

〔移録〕①　『大正新脩大蔵経』巻48　pp.337a—345c　1928.——㊦

①　矢吹慶輝『鳴沙余韻』影印　pp.102—103　1930.

①　鈴木大拙・公田連太郎『燉煌出土六祖壇経』pp.1—64　1934.——㊟

①　宇井伯寿『第二禅宗史研究』pp.117—171　1941.——㊥

①㊦㊟㊥　Chan, W. *The Platform Scripture* pp. 24—150 New York 1963.

①㊦㊟㊥　Yampolsky, P. *The Platform Sutra of the Sixth Patriarch* pp.01—030　New York and London　1967.

〔訳註〕①㊦㊟　宇井伯寿『第二禅宗史研究』pp.114—172　1941.

①㊦㊟㊥　Chan, W. *The Platform Scripture* New York 1963.〔英訳〕

①㊦㊟㊥　Yampolsky, P. *The Platform Sutra of the Sixth Patriarch* New York and London　1967.〔英訳〕

①㊦㊟㊥　柳田聖山「六祖壇経（六祖の戒壇院説法集）」〔「世界の名著」続3『禅語録』pp.93—179〕1974.

〔論文〕

胡　適　神会与六祖壇経〔『神会和尚遺集』pp. 73—90〕上海1929, 1930.——尚これは後に『胡適校敦煌唐写本 神会和尚遺集 附胡先生晩年的研究』pp. 73—90 台北 1970. として再版。

松本文三郎　六祖壇経の書誌学的研究〔『禅学研究』17, 18〕1932.——尚これは後に『正法輪』766～782 1933. 784～786 1934. に，更に「六祖壇経の研究」として『仏教史雑考』pp.87—168 1944. に再版。

矢吹慶輝　南宗頓教最上大乗摩訶般若波羅蜜経　六祖恵能大師於韶州大梵寺施法

壇経一巻〔『鳴沙余韻解説』pp. 300—303〕1933.
鈴木大拙　燉煌出土六祖壇経解説及目次〔『燉煌出土神会禅師語録解説及目次，燉煌出土六祖壇経解説及目次，興聖寺本六祖壇経解説及目次』pp. 21—22〕1934.
今長谷蘭山　六祖壇経研究資料〔『禅学研究』23〕1935.
久野芳隆　流動性に富む唐代の禅宗典籍——燉煌出土本に於ける南禅北宗の代表的作品〔『宗教研究』新14—1〕1937.
鈴木大拙　六祖壇経に関する二三の意見〔『大谷学報』19—1〕1938.
川上天山　西夏語訳六祖壇経について〔『支那仏教史学』2—3〕1938.
宇井伯寿　壇経考〔『第二禅宗史研究』pp.1—116〕1941.
鈴木大拙　六祖壇経，慧能及慧能禅につきて〔『禅思想史研究』第2 pp.325—380〕1951.——尚これは後に『鈴木大拙全集』巻2 pp.310—361 1968.として改訂出版。
中川　孝　六祖壇経の異本に就て〔『印度学仏教学研究』2—1〕1953.
関口真大　神会の南宗独立〔『禅宗思想史』pp.153—166〕1964.
柳田聖山　大乗戒経としての六祖壇経〔『印度学仏教学研究』12—1〕1964.
柳田聖山　古本『六祖壇経』の推定，古本『六祖壇経』の課題，古本『六祖壇経』の作者—その1，古本『六祖壇経』の作者—その2〔『初期禅宗史書の研究』pp.148—212〕1967.
敦煌本『六祖壇経』の成立—その1，敦煌本『六祖壇経』の成立—その2〔『初期禅宗史書の研究』pp.253—278〕1967.
中川　孝　敦煌本壇経の問題点〔『印度学仏教学研究』17—1〕1968.
印　順　壇経之成立及其演変〔『中国禅宗史』pp.237—280〕台北 1971.
中川　孝　六祖壇経異本の源流〔『印度学仏教学研究』21—2〕1973.
柳田聖山　六祖壇経〔「世界の名著」続3『禅語録』pp.66—69〕1974.

〔略記〕　本書は，六祖恵能が韶州の大梵寺講堂の授戒会における戒壇での高座説法を，弟子の法海が集録したいわば「恵能語録」という形態を持ったものではあるが，古来その成立及び内容について，種々の疑問が投げかけられる一方，多くの異本を生み出した極めて問題の多い書である。

その数多い異本の中で，敦煌本といわれるスタイン本の①は，現存唯一にして最古の写本として重視される。この①以外に，その存在したことを報ぜられたものに2種がある。まず敦煌の任子宜氏の所蔵になるという③は，向達氏の「西征小記」〔『唐代長安与西域文明』pp. 368—369〕によるもので，『南宗頓教最上大乗壇経』といわれ，神会の『壇語』『南宗定是非論』，浄覚の『注般若波羅蜜多心経』の4種を含む凡そ93葉からなる梵夾式蝶装本で，五代宋初の伝抄本であるというが，今日その所在は明らかではない。今一つ

の旅順博物館旧蔵とされる②は，『敦煌遺書総目索引』所収の「敦煌遺書散録」中，「旅順博物館所存敦煌之仏教経典」の179番に記されたもので，そこには『南宗頂教（最上大乗摩訶般若波羅蜜多経）』とあり，「頂」は「頓」の誤りとみられるからして，これも『壇経』の一異本に違いないのであるが，今日所在のまったく知れないものである。従って，今日みることの可能なのは，僅かにスタイン本の①のみである。

この①は，褐色の比較的厚い紙２紙を真中で折って，赤糸で綴じて１帖８頁とし，これが13帖あって全体で104頁，縦27cm，横10.5cmの長方形手帖本である。この形式は，『無心論』と『頓悟無生般若頌』の前半を有するS.5619と同一である。紙質も両者ほぼ同じであるが，この方は３紙を１帖とし，大きさも縦14.5cm，横10cmと小さい。

次にその書写形式であるが，首部１～４頁と尾部97～104頁は共に白紙で，首題は５頁に記されている。第１行に「南宗頓教最上大乗摩訶般若波羅蜜経」，第２行第３行は２字下げとなって，第２行に「六祖恵能大師於韶州大梵寺施法壇経一巻」，第３行に「兼受無相（３字アケ）戒弘法弟子法海集記」となっている。その後各頁平均６行，１行22～28字で本文が書写されているが，字の大小，行の曲り，誤字，脱字，あて字等が多く，かなりの粗悪本である。88～89頁は，恐らく頁をめくる際に誤って重ねてめくったとみられ，白紙になっている。尾題は95頁の５行目に，本文最後の「蜜意」の２字の下に１字あけて，「南宗頓教最上大乗壇経法一巻」とあり，「法」の１字の違いはあるが，③の首題と一致する。96頁は１～４行にわたって菩薩の法号が記されて擱筆し，以下は104頁まで白紙となる。

このスタイン本の①を最初に発見したのが，矢吹慶輝氏である。1928年『大正蔵経』巻48に収めると共に，1930年『鳴沙余韻』に影印を収録され，1933年その解説『鳴沙余韻解説』を出版し，その篇外の稀覯残巻として本書を解説された。ただこの中で矢吹氏は，S.5475をS.377とされているが，これは『無心論』のS.5619をS.296とされたと同様に，仮番号によったとみられ，訂正を要する。矢吹氏は解説の中で，本書に関する先行論文として，胡適氏の「神会与壇経」，松本文三郎氏の「六祖壇経の書誌学的研究」を挙げられ，松本氏に敦煌本，興聖寺本，明蔵本の３本の対比，胡適氏に壇経神会撰述説のあることを述べ，自らは本書が法海の集記に基き神会一派の製編であること，法海，道際，悟真の三代に伝授されたこと，敦煌本が古型を伝え，明蔵本は多くの加筆がなされ，興聖寺本はその中間に位置すること，西夏文壇経残本の存すること等を論述された。

翌1934年，鈴木大拙氏は，公田連太郎氏と共に本書を宋元の刊本と校合し，興聖寺本との対比を容易にするために，全体を57段に分けて校定出版された。

ついでペリオ本『絶観論』の紹介を中心に，唐代禅宗典籍を論述された久野芳隆氏は，胡適説と同じく本書を神会の作ったものと主張された。

先に矢吹氏が関説された西夏語訳『壇経』については，1938年川上天山氏が「西夏語訳六祖壇経について」と題する論文で紹介された。この西夏語訳『壇経』については，柳田聖山氏の「禅籍解題」〔『禅家語録』Ⅱ付録pp. 460—461〕に2種の存在を報じている。いずれも西田竜雄氏の解説に依っているが，川上氏紹介のものは残簡6葉で，本文は敦煌本にもっともよく一致し，西夏の恵宗季秉帝即位4年（1071）に翻訳されたもので，西夏文としてはもっとも初期のものに属し，更にこれをシナ語に重訳したものがあるという。今一つは竜谷大学所蔵（橘瑞超氏旧蔵）の残片1葉で，『西域文化研究』第4「中央アジア古代語文献」の図版41に発表されたものであり，前者に接続し元来は同一本であったらしいという。『壇経』の流通における朝鮮，日本と別の流れを示すものとして注目すべきものである。

鈴木，公田両氏による本文校定の仕事は，1941年宇井伯寿氏による「壇経考」〔『第二禅宗史研究』所収〕の労作へと続く。宇井氏はその校訂訳註に際し，古型すなわち恵能の説法を伝える部分と，後世神会の徒による附加とみられる部分とに分け，後者を細字で示してその古型を推定された。また『壇経』の多くの異本についても詳細な検討を加え，敦煌本を基に大乗寺本，興聖寺本，徳異本，宗宝本の増減を対照表で示された。

先に校定本を出された鈴木氏は，1951年『禅思想史研究』第2において，本書は「法海集」と明示しており，法海や神会を中心とした南宗の伝授本として付嘱伝承されたもので，その伝授の間に付加がなされたとの見解を述べられ，胡適氏の神会撰述説を「そう一概には結論出来ぬ」として批判された。

宇井氏の行った古型部分と附加部分を弁別する方法は，その後中川孝氏に承けつがれていったが，撰者の問題は，その後1964年関口真大氏が本書と『壇語』との密接な関係から，胡適氏の見解に賛同して，「神会，もしくは神会一派の成立せしめたもの」〔『禅宗思想史』p. 163〕とされ，かくして『壇経』主要部分を神会作とする胡適説，久野説，神会又は神会一派の作とする矢吹説，関口説に対し，恵能の説法集に一部付加されたとする鈴木説，その付加を神会一派によるとする宇井説等が出されて，容易に結論が出なかったのである。

こうした古型部分の作者が，恵能，神会乃至は神会一派，すなわち南宗系の人であるとする従来の諸説に対して，まったく別の見地から，それを牛頭系，特に六祖慧忠のものではないか，とする新説を出されたのが柳田聖山氏である。柳田氏は既に1964年，「大乗戒経としての六祖壇経」と題する論文にて，独自の無相心地戒を説く『壇経』に注目されていたが，1967年『初期

禅宗史書の研究』では，それを一歩進めて，この革新的無相戒の主張こそ，恵能系とは違った南北両宗と流れを別つ牛頭系のものであるとみることによって，今日みることのできる敦煌本『壇経』となる過程がかなり自然に推知できるのではないか，と推論されている。この新説を含む従来の諸説については，その後に出版された印順氏の『中国禅宗史』では，これら諸説を逐一批評はせずに自己の結論を述べると前置きして，次のようにいわれる。すなわち法海が集記した『壇経』原本は，大梵寺の開法を記録した原始的な主体部分と，平時の弟子との問答，臨終の付嘱，滅後の情形を記した附録部分とに二分してみるべきで，前者は恵能生前に成立していたもの，後者は弟子が集録して前者の後に附加したものであり，今日の敦煌本は，悟真が伝授本として伝持していたものを，神会門下が修補したものであるとする。従ってこの説は，宇井説に最も近いものであるが，成立問題は尚流動的であり，更に今後の研究をまたねばならないのである。

こうした成立問題とは別に，本書には，チャン氏，ヤンポロスキー氏による2種の本文校定と英訳があり，最近柳田氏による現代語訳が出版されて，従来難解とされていた本文が，親しみ易い形で我々に提供されたことは喜ぶべきことである。

21 南天竹国菩提達摩禅師観門

①S. 2583 ②S. 2669 ③S. 6958 ④P. 2058 ⑤竜谷大学所蔵122『観門法大乗法論』本

〔移録〕① 矢吹慶輝『鳴沙余韻』影印 p. 78 II 1930. ——㊦

① 『大正新脩大蔵経』巻85 p. 1270 b — c 1932.

①②⑤㊦ 鈴木大拙『禅思想史研究』第2 pp. 224—226 1951. ——㊟
——尚これは後に『鈴木大拙全集』巻2 pp. 219—221 1968. として改訂出版。

③㊟ 田中良昭 「『南天竺国菩提達摩禅師観門』と『修行最上大乗法』(擬)」〔『駒沢大学仏教学部研究紀要』23 pp. 126—128〕1965.

〔論文〕

矢吹慶輝 敦煌出土支那古禅史並に古禅籍関係文献に就いて〔『鳴沙余韻解説』pp. 540—543〕1933.

宇井伯寿 達摩の教説〔『禅宗史研究』pp. 34—35〕1939.

鈴木大拙 無心論及観門 及倫敦本S. 2669号長巻子〔『禅思想史研究』第2 pp. 214—216〕1951. ——尚これは後に『鈴木大拙全集』巻2 pp. 210—211 1968. として改訂出版。

関口真大 「達摩禅師観門」と念仏禅〔『達摩大師の研究』pp. 295—316〕1957.

田中良昭　『南天竺国菩提達摩禅師観門』と『修行最上大乗法』(擬)〔『駒沢大学仏教学部研究紀要』23〕1965.

〔略記〕本書は，問答形式でもって禅定，禅観等の語義と禅法の次第としての七種の観門を説いたものであり，その後に「大声念仏十種功徳」を付した比較的短い一篇である。

1930年スタイン本の①を発見した矢吹慶輝氏が，その写真を『鳴沙余韻』に収録し，その解説を1933年『鳴沙余韻解説』に発表して以来その存在が知られたもので，1932年には『大正蔵経』巻85にも収められた。ついで鈴木大拙氏は，同じくスタイン本の②と竜谷大学所蔵の⑤の存在することを発見され，②を底本とし①⑤と矢吹氏校定本とを対校して，1951年『禅思想史研究』第2に掲げられた。その後1965年に至り，③の存在することを知った私は，それを鈴木氏校定本と対照して発表したが，この③は『観門』の後に『楞伽経』の主要教説とされる「五法三自性八識二無我」の説明文があり，ついで他の諸本に存する「大声念仏十種功徳」に移るのであるが，③のみはその十種功徳の内第三以降第十までを取り除き，そこに『修行最上大乗法』(擬) なるものが加えられた独特のものである。またペリオ本の④は，『大乗五方便北宗』その他との連写であるが，標題は最後の「門」の字を欠き，本文も禅法の問までで以下未完となっている。柳田聖山氏の『禅家語録』Ⅱに付された「禅籍解題」によると，北京本海51も本書の異本としてあげておられるが，これは「高声念仏十種功徳」のみで，『観門』そのものとは直接の関係はないようである。こうして今日までに5種の異本の存在が知られるに至った。

ところで本書は，「南天竺菩提達摩禅師」の名を冠してはいるが，矢吹氏は禅定の説明に「唐言浄慮」といい，しかも浄慮は静慮の音通で，これも新訳であるからして，当然達摩に仮托したものであり，中唐以後禅と念仏を調和した一派の主張，とされている。宇井伯寿氏もまた同様の理由によって，他の何人かが作ったものが，達摩に帰せられたに過ぎないもの，とみておられる。しかし鈴木大拙氏は，最後の「大声念仏十種功徳」は『観門』に関係のないもので，「達摩製」以外のものであるとされているからして，『観門』そのものは「達摩製」とみておられたのであろう。

以上の諸説をふまえて関口真大氏は，坐禅についての七種観門と念仏についての十種功徳とは切り離すべきではなく，いわゆる五祖下の念仏禅系で伝承されたものではないか，と推論された。私もこの見解と同じ立場をとるのであるが，更に③における「大声念仏十種功徳」の第三以下をとり去って，密教的要素の強い『修行最上大乗法』を加えたことは，禅と念仏との結合の上に，更に中唐以後における禅と密教の交渉の跡を留めたものではないか，

と推定したのである。

その外に注目すべきことは，本書にチベット音写本の存することである。すなわち1961年『東方学報』京都31に，「吐蕃支配期の敦煌」と題する論文を発表された藤枝晃氏は，チベット音写本の例としてP. 1228をあげ（p. 261），その書き出しの "gam the...g kug ḥphu de dar ma .....Kvan mun" が，「南天竺国菩提達磨〔禅師〕観門」と還元できると述べられている。

すなわち禅と念仏の結合の上に成立した本書が，密教的改変の手を加えられたり，チベット音写本を出現させる等，多彩な発展をした点で注目すべきものと考えられる。

22 南陽和上頓教解脱禅門直了性壇語

①S. 2492 ②S. 6977 ③P. 2045 ④寒81 ⑤敦煌・任子宜氏所蔵本

〔移録〕④ 鈴木貞太郎（大拙）『燉煌出土少室逸書』影印 pp. 37—55 1935.

④ 鈴木貞太郎（大拙）『校刊少室逸書及解説』pp. 57—71 1936. ——㊀——尚これは後に『鈴木大拙全集』巻3 pp. 308—317 1968. として改訂出版。

③㊀ 胡 適「新校定的敦煌写本神会和尚遺著両種」〔『中央研究院歴史語言研究所集刊』29 pp. 828—836〕台北 1958. ——㊁——尚これは後に『胡適校敦煌唐写本 神会和尚遺集 附胡先生晩年的研究』pp. 225—252 台北 1970. として再版。

①②㊀㊁ 篠原寿雄「荷沢神会のことば——訳注『南陽和上頓教解脱禅門直了性壇語』」〔『駒沢大学文学部研究紀要』31 pp. 5—32〕1973. ——㊂

〔訳註〕③㊀ Liebenthal, W. "The Sermon of Shên-hui" 〔*Asia Major* new series Ⅲ—2 pp. 132—155〕London 1952. 〔英訳〕

①②㊀㊁ 篠原寿雄「荷沢神会のことば——訳注『南陽和上頓教解脱禅門直了性壇語』」〔『駒沢大学文学部研究紀要』31 pp. 1—33〕1973.

③④㊂ 中村信幸 『南陽和上頓教解脱禅門直了性壇語』〔『駒沢大学大学院仏教学研究会年報』8 pp. 137—146〕1974.

〔論文〕

鈴木大拙 神会和尚の「壇語」と考うべき燉煌出土本につきて〔『大谷学報』16—4〕1935.

鈴木貞太郎（大拙） 和尚頓教解脱禅門直了性壇語〔『少室逸書解説』pp. 50—68〕1936. ——尚これは後に『鈴木大拙全集』巻3 pp. 290—307 1968. として改訂出版。

胡 適 校写「南陽和上頓教解脱禅門直了性壇語」後記〔「新校定的敦煌写本

神会和尚遺著両種」『中央研究院歴史語言研究所集刊』29〕台北 1958.
——尚これは後に『胡適校敦煌唐写本　神会和尚遺集　附胡先生晩年的研究』pp. 319—335　台北　1970.，更に『胡適禅学案』pp. 253—269 1975. として再版。亦，それは別に篠原寿雄氏により「胡適先生校写『南陽和上頓教解脱禅門直了性壇語』後記」〔『宗教学論集』3〕1969. として邦訳。

鈴木哲雄　荷沢神会論〔『仏教史学』14—4〕1969.

印　順　南陽和上頓教解脱禅門直了性壇語〔『中国禅宗史』pp. 300—302〕1971.

〔略記〕本書は，荷沢神会が南陽竜興寺で行った授戒会における戒壇での説法の語を記録したもので，神会の思想を知る重要資料の一つである。

今日5種の異本の存在が知られているが，⑤の任子宜氏所蔵本については，先に『壇経』の略記で述べた如く，向達氏の「西征小記」の記載によってその存在が知られるのみで，実際に内容を窺いうるのは他の4本である。

1935年鈴木大拙氏が北京本の④を発見し，『少室逸書』と『大谷学報』16—4並びに『校刊少室逸書及解説』にて本文紹介と解説をされたのに始まり，1952年リーベンタール氏がジェルネ氏の指摘によってペリオ本の③の存在を知り，それと鈴木氏による『少室逸書』中の北京本④とを校合してその英訳を発表されたのを機に，鈴木，デマチーノ両氏が③及びその他をパリの国民図書館にて調査し撮影され，それを胡適氏があらためて調査された結果，③に含まれる本書と『南宗定是非論』を既存の異本と校合し，両書並に神会に関する新たな研究成果を加えて，1958年「新校定的敦煌写本神会和尚遺著両種」と題して発表された。すなわち本書に関しては，リーベンタール氏同様③と④との校合である。こうして，北京，ペリオの2本が写本としてもよく，識者の関心をあつめていたのであるが，近年スタイン本にも2種の異本の存在が知られた。すなわち①と②である。ただこの両者は，『敦煌遺書総目索引』では，共に「仏経」というにすぎないもので，いずれも僅か2紙の中間部分の断片であり，特に②は破損が著しい。従って①②は，③④と較べれば，ほとんどとるに足らないものといえよう。

本書の作者が神会であることは問題ないが，その成立時期については，胡適氏が本文校定に後記を付して次のように論述している。すなわち標題の「南陽和上」の語によって，本書は神会が南陽に住した時期になったものであり，それは『宋高僧伝』に，開元8年（720）勅命によって南陽の竜興寺に住せしめられたとする記載に基き，この南陽にほぼ10年間住したことから，本書の成立時期を720年から10年間，すなわち神会の比較的早い頃の著作であるとされたのである。尚この胡適氏の校定になる本文と後記は，胡適氏による神会研究の邦訳を続けておられる篠原寿雄氏により，1969年氏自身の若

干のコメントを加えた後記の邦訳が，更に1975年氏自身による本文の校定と訳註が発表された。またこの篠原氏の校定と邦訳をふまえて，語学的視点から本文を追語的に邦訳したものに，中村信幸氏の翻訳がある。こうしてリーベンタール氏の英訳と篠原，中村両氏の邦訳が出揃ったのである。

ところで先の成立時期に関する胡適説に対して，近年関説した人に鈴木哲雄氏と印順氏がある。1969年鈴木氏は「荷沢神会論」にて，「荷沢」を冠せられて一般に呼称されるのは寂後のことであり，本書は内容面からも北宗排撃すなわち『南宗定是非論』以前の早い時期のものであるという点から，胡適説同様南陽竜興寺時代になったものとする。これに対し，1971年『中国禅宗史』を出版された印順氏は，「東京荷沢寺神会和上，毎月作檀場，為人説法，云々」という『歴代法宝記』の記事を例証とし，本書は神会が洛陽にあって開法し，禅を伝えた記録であり，南陽和尚の名は神会の僧籍が南陽竜興寺に在ったからいわれた名にすぎないとして，胡適説に反論されている。しかし本書の標題を素直に読むならば，やはり胡適氏の南陽竜興寺での説法とみる方が自然ではないかと考えられる。

23　南陽和尚問答雑徴義并序〔神会語録，神会録〕

①S. 6557　②P. 3047　③石井光雄氏旧蔵本

〔**移録**〕② 胡　適　神会語録第一残巻（巴黎蔵敦煌写本）〔『神会和尚遺集』pp. 97—152〕上海　1929, 1930. ——㊁——尚これは後に『胡適校敦煌写本　神会和尚遺集　附胡先生晩年的研究』pp. 97—152 台北　1970. として再版。

③ 石井光雄『燉煌出土神会録』影印 pp. 1—65 1932. ——㊂

㊂㊁ 鈴木貞太郎・公田連太郎『燉煌出土荷沢神会禅師語録』 pp. 1—68 1934. ——㊀——尚これは後に『鈴木大拙全集』巻3 pp. 236—288 1968. として改訂出版。

①㊁㊀ 胡　適　神会和尚語録的第三個敦煌写本：『南陽和尚問答雑徴義：劉澄集』〔『中央研究院歴史語言研究所集刊』外編第4種 pp. 8—19〕台北　1960. ——尚これは後に『胡適校敦煌唐写本　神会和尚遺集　附胡先生晩年的研究』pp. 426—452　台北　1970. として再版。

〔**訳註**〕②㊁ Gernet, J. *Entretiens du maître de Dhyāna Chen-Houei du Ho-tsö (668—760)* Hanoi 1949.〔仏訳〕——尚これは後に花園大学祖録研究会より『フランス語訳荷沢神会禅師語録』1958. としてタイプ印書により再版。

〔**論文**〕

胡　適　跋神会語録第一残巻〔『神会和尚遺集』pp. 155—158〕上海1929, 1930.

——尚これは後に『胡適校敦煌唐写本　神会和尚遺集　附胡先生晩年的研究』pp. 153—158 台北 1970. として再版。

鈴木大拙　燉煌出土神会録解説〔『敦煌出土神会録』付録 pp. 1—14〕1932.——尚これは後に，鈴木貞太郎・公田連太郎『燉煌出土荷沢禅師語録解説』pp. 1—12 1934. として再版。

Gernet, J. "Complément aux Entretiens du maître de Dhyāna Chen-Houei (668—760)" 〔*Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient* Vol. 44 no. 2〕 Hanoi 1954.

胡　適　神会和尚語録的第三個敦煌写本：『南陽和尚問答雑徴義：劉澄集』 I 神会語録的三個本子的比勘〔『中央研究院歴史語言研究所集刊』外編第4種 pp. 1—8〕1960.——尚これは後に『胡適校敦煌唐写本　神会和尚遺集　附胡先生晩年的研究』pp. 403—425　台北　1970.，更に『胡適禅学案』pp. 333—355 1975. として再版。

Demiéville, P. "Deux Documents de Touen-Houang sur le Dhyāna Chinois" 〔『塚本博士頌寿記念仏教史学論集』pp. 01—027〕1961.

印　順　南陽和上問答雑徴義〔『中国禅宗史』pp. 308—309〕台北　1971.

〔**略記**〕本書は，唐山主簿劉澄が道俗の問に対する神会の答を集録し，それに序を付したもので，従来一般に「神会語録」乃至は「神会録」の名で呼ばれ，神会の思想を知る根本資料とされたものである。

本書が最初に知られるようになったのは，1926年胡適氏がパリの国民図書館にてペリオ本の②を発見し，その校定を1927年上海の新月書店より，更に翌1930年同じく上海の亜東図書館より「神会語録第一残巻」の名のもとに『神会和尚遺集』の巻1に収録して出版されたことによる。この写本は首尾を欠き題名も知られなかったのであるが，胡適氏はその跋文にて，本書が荷沢大師神会の語録であること，従ってその標題を「神会語録」としたことを述べられた。

ついで1932年，積翠軒石井光雄氏が自ら所蔵する敦煌写本③を『燉煌出土神会録』と題し，影印にて出版され，それに鈴木大拙氏が『燉煌出土神会録解説』と題する小冊子を付された。この写本も首部を欠き，末尾は完全であるが，尾題はなく，巻末に別人の手になる唐貞元8年（792）沙門宝珍と判官趙看琳が北底にて張大夫の命により校勘し訖ったという同年10月22日の奥付がある。鈴木氏も指摘されるように，この③が胡適校定の②と異なる最も大きな特徴は，末尾に達摩から慧能に至るまでの略伝（『師資血脈伝』といわれるもの）が付記され，そこでは六代の祖師が『金剛経』に依って得道したことを強調しており，更に最後に『大乗頓教頌幷序』が記されていることである。

それから2年後の1934年，③の胡適校本と②の石井影印本の両者を対校し，新たに校定して，敦煌本並に興聖寺本『壇経』を併せ，解説を付して出版されたのが鈴木大拙，公田連太郎両氏による『燉煌出土荷沢神会禅師語録』である。

先の胡適氏による『神会和尚遺集』の出版は，フランスの東洋学者ジェルネ氏の注目するところとなり，この仏訳が1949年ハノイの極東フランス学院から *PEFEO*（極東フランス学院出版物）巻31として出版された。ジェルネ氏は更に意欲的に神会研究に取り組まれ，1951年にはパリの *Journal Asiatique*（アジア学報）239巻1号に，"Biographie du Maître Chen-Houei du Ho-tsö (668—760), Contribution à l'histoire de l'école du Dhyāna"（「禅宗史に貢献せる荷沢神会禅師伝」）と題する論文を，更に1954年には，ハノイの *BEFEO*（極東フランス学院紀要）44巻2号に，先に仏訳した『神会禅師語録』の補遺を発表された。それから2年後の1956年，京都大学人文科学研究所でスタイン文書の写真を調査された入矢義高氏が，スタイン本の①を発見され，これを胡適氏に知らせた結果，胡適氏は従来のペリオ本の胡適校本，石井本と胡適校本を対校した鈴木・公田校本に，新出のスタイン本の①を加えて3本を対校し，1960年台北から「神会和尚語録的第三個敦煌写本：『南陽和尚問答雑徴義：劉澄集』」と題して『歴史語言研究所集刊』外篇第4種に発表され，こうして現存3本がすべて公刊されることとなった。この①の出現は，その標題が『南陽和尚問答雑徴義』であること，これが円仁の『入唐新求聖教目録』に「南陽和尚問答雑徴義一巻，劉澄集」とあるのと一致し，古くわが国にも将来されていたこと，巻首の劉澄の序文の内容を明らかにし得たこと等種々の点で画期的な意義を持つものである。尚本文は石井本の前半に一致し，3本中ではもっとも初期のものとみられている。

その翌1961年には，やはりフランスの世界的東洋学者ドミエヴィル氏が，"Deux Documents de Tcuen-Houang sur le Dhyāna Chinois"（「中国禅に関する二種の敦煌文献」）と題する論文を『塚本博士頌寿記念仏教史学論集』に発表されたが，これは『問答雑徴義』と題する『神会語録』の新資料すなわち①のS. 6557と，『頓悟大乗正理決』と題するチベットの宗論に関する中国側記録の新資料であるS. 2672の2種を意味し，それらを紹介論究されたものである。このように本書は，日本の鈴木氏，中国の胡適氏，フランスのジェルネ氏とドミエヴィル氏というように，世界有数の学者によって研究がなされてきたものであり，神会研究に対する世界的関心の高いことを如実に示したものといえよう。

尚先に同じく神会の『壇語』の成立時期について胡適説を批判した印順氏は，本書の『南陽和尚問答雑徴義』の標題における南陽和尚についても，こ

れが習慣上の称呼にすぎず，本書も同じく南陽時代の成立ではなく，『南宗定是非論』以後比較的遅く集成されたものという説を主張しているが，先の『壇語』の場合と同様，鈴木哲雄氏の「南陽和尚の呼称は神会のある時期を示す言葉」という説により，本書も南陽時代の成立とみる方が妥当ではないかと考えられる。

24　二入四行論（擬）〔菩提達摩論，菩提達摩四行論，二種入，安心法門〕

①S. 2715　②S. 3375　③S. 7159　④P. 2923　⑤P. 3018　⑥P. 4634　⑦P. 4795　⑧宿99

〔敦煌出土以外のもの〕

⑨朝鮮『禅門撮要』本　⑩『少室六門集』本

〔**移録**〕⑩　『卍版続蔵経』1輯2編15套5冊404右—左 1911.

⑩　『大正新脩大蔵経』巻48 pp. 369c—370c 1928.

⑧　鈴木貞太郎（大拙）『燉煌出土少室逸書』影印 pp. 1—22 1935.

⑧⑨　鈴木貞太郎（大拙）『校刊少室逸書及解説』pp. 1—39 1936. ——㊙

①⑧⑨　鈴木大拙『禅思想史研究』第2 pp. 138—162 1951. ——㊙——尚これは後に『鈴木大拙全集』巻2 pp. 141—161 1968. として改訂出版。

⑨　花園大学祖録研究会『禅門撮要』上 pp. 49—94 1954.

⑨　鏡虚惺牛・雪峰鶴夢『新刊懸吐禅門撮要』pp. 137—163 1968.

①②⑤⑥⑧⑨⑩㊙㊙　柳田聖山『達摩の語録〔二入四行論〕』〔「禅の語録」I pp. 23—250〕1969. ——尚これは後に「達摩二入四行論」〔「世界古典文学全集」36A『禅家語録』I pp. 5—66〕1972. として再版。

④　田中良昭「四行論長巻子雑録の一異本」〔『宗学研究』13 pp. 36—39〕1971.

〔**訳註**〕①②⑤⑥⑧⑨⑩㊙㊙　柳田聖山『達摩の語録〔二入四行論〕』〔「禅の語録」I pp. 23—250〕1969. ——尚これは後に「達摩二入四行論」〔「世界古典文学全集」36A『禅家語録』I pp. 5—66〕1972. として再版。

〔**論文**〕

禿氏祐祥　少室六門集について〔『竜谷学報』309〕1934.

鈴木貞太郎（大拙）解説及びその内容の研究〔『少室逸書解説』pp. 1—46〕1936. ——尚これは後に『禅思想史研究』第2 pp. 103—138 1951. として，更に『鈴木大拙全集』巻2 pp. 108—141 1968. として改訂出版。

宇井伯寿　達摩の教説，慧可の教説〔『禅宗史研究』pp. 17—34，47—59〕1939.

水野弘元　菩提達摩の二入四行説と金剛三昧経〔『印度学仏教学研究』3—2〕1955.——尚これは別に内容を詳説し，『駒沢大学研究紀要』13 1955.に収録。

中川　孝　菩提達摩の研究——四行論長巻子を中心として〔『文化』20—4〕1956.

関口真大　燉煌本達摩大師四行論について〔『宗教文化』12〕1957.

関口真大　「達摩大師四行論」と「安心法門」〔『達摩大師の研究』pp. 317—344〕1957.

田中良昭　四行論長巻子と菩提達摩論〔『印度学仏教学研究』14—1〕1965.

柳田聖山　北宗禅の一資料〔『印度学仏教学研究』19—2〕1971.

田中良昭　四行論長巻子の一異本〔『宗学研究』13〕1971.

小畠宏充　チベットの禅宗と『歴代法宝記』〔『禅文化研究所紀要』6〕1974.

〔**略記**〕本書は，禅宗初祖菩提達摩の唯一の真説とされる「二入四行説」をはじめ，達摩を中心とした初期禅宗の人たちの言葉を直接に伝える貴重な文献として重視されるものである。

近年禅宗語録の訳註，現代語訳が次々と出版されているが，本書もこの面に積極的努力を払われている柳田聖山氏の手によって，「禅の語録」シリーズの第1に『達摩の語録〔二入四行論〕』と題して，本文校定，読み下し文，現代語訳，註からなる研究成果が出版され，更にそれは「世界古典文学全集」36A『禅家語録』Iにも収録された。しかもその際両書の巻首に，本書についての解説がなされており，私も新出の④を紹介するにあたって，本書に関する従来の研究成果を要約し述べているので，それらを参照していただきたい。また達摩の唯一の真説とされる二入四行説は，他にも道宣の『続高僧伝』巻16，『楞伽師資記』，『景徳伝燈録』巻30に「菩提達摩略弁大乗入道四行幷弟子曇林序」として掲げられ，⑩の『少室六門』にも「二種入」として別立されている。

ところで本書は，この二入四行説を首とする1万余字からなる長篇で，現在までに8種の異本の存在が知られている。1935年鈴木大拙氏が北京で⑧を発見し，『少室逸書』に紹介されたのを手始めに，これと⑨の朝鮮刊本『禅門撮要』所収「菩提達摩四行論」とを対校し，その翌1936年『校刊少室逸書及解説』に発表されて知られるようになったものである。鈴木氏は同年ロンドンでスタイン本の①を発見され，1951年①⑧⑨の3本対校を『禅思想史研究』第2に発表された。

その後本書の異本の存在は長い間知られなかったが，敦煌文献のマイクロフィルムがわが国に将来されたことから，それらの写真による調査がかなりのところまで可能となり，かくして新たにスタイン本の②，ペリオ本の⑤⑥

の都合3本を発見した私は，1965年「四行論長巻子と菩提達摩論」と題する小論で，それらの存在を紹介した。しかしこれらはいずれも中間部分の断片にすぎず，資料的価値は決して高いものではない。ただ⑤によって，本書の一部がかって「菩提達摩論」の名で呼ばれていた事実が判明した。更にペリオ本の④の出現によって，従来知られていた部分以外のものの存在することがわかり，しかもそれでも尚本書が完結していないことが明らかとなった。その後スタイン本の③は，1972年滞英中大英博物館の書庫において実地調査をした際に見出したもので，二入四行説部分の断片であり，また柳田氏によれば，ペリオ本に⑦が存在するという。こうして今日では敦煌本に8種の異本の存することが明らかとなったが，首部の破損や断欠のために，その標題を記すのは僅かに①の尾題に「論一巻」とあるのみで，先の⑤の「菩提達摩論」及び『禅門撮要』本の「菩提達摩四行論」も部分名にすぎず，今日尚正式の題名は明確にされていない。また従来『少室六門』の一部であった「安心法門」が本書の抜粋であることも明らかとなり，『宗鏡録』巻97から巻100にわたって引用されていた諸禅師の言葉も，同じく本書に由来するものであることが判明し，こうして本書が初期禅宗文献のオリジナルソースであることが明らかとなった。

本書は鈴木氏によって紹介されて以来，内容的には1二入四行論及略序等，2雑録第一，3雑録第二の3部に分けられており，1の末尾に向居士の慧可への返書があることと，「安心法門」が2の抜粋であることとも関連して，本書の撰述者に関して従来種々異説を生じた。すなわち鈴木氏は1，2を達摩の説（向居士の返書は竄入），3は慧可をはじめとする達摩以外の人の説とされたのに対し，宇井伯寿氏は，2を慧可のもの，従ってこの部分より抄出した「安心法門」も同じく慧可のものと推論された。この両説に対し，中川孝氏は2を慧可所述とする宇井説を支持されたが，それに対する関口真大氏の反論があり，私も前掲の小論にて同じく中川説に疑問を投げかけた。このように本書の撰述者に関しては未解決の点が多く，尚今後の研究をまたねばならない。

今一つ本書に関連するものとして，達摩の二入四行説と『金剛三昧経』の前後関係の問題がある。宇井氏は達摩の理入行入を『金剛三昧経』入実際品第五からの引用とされたのであるが，水野弘元氏は『金剛三昧経』を初唐に成立した偽作経典であることを論証することによって，むしろ達摩の二入四行説を『金剛三昧経』が依用したとする新説を出され，学会の注目をあつめた。この『金剛三昧経』入実際品第五は敦煌本S. 2794にも見出され，漢文からのチベット訳も存在するという。更に最近発表された小畠宏充氏の論文「チベットの禅宗と『歴代法宝記』」によれば，本書に「三蔵法師言」として

引用された「安心法門」の冒頭部分が，『歴代法宝記』の影響下にあって，初祖菩提達摩多羅禅師のものとしてチベット訳されているということである。

こうして本書は，幾多未解決の問題をはらみつつも，最初期の「禅宗語録総集」として，中国禅からチベット禅にいたるまで多彩な発展をなし，更に今後の研究をまっているというのが現状である。

25 法性論（擬）

①S. 2669　②竜谷大学所蔵 122『観門法大乗法論』本

〔移録〕①②　鈴木大拙『禅思想史研究』第2 pp. 470—471 1951. ——尚これは後に『鈴木大拙全集』巻2 pp. 444—445 1968. として改訂出版。

〔論文〕

鈴木大拙　竜谷大学図書館蔵敦煌本「菩提達摩観門法　大乗法論」殊に其中の「修心要論」に就きて〔『校刊少室逸書解説』付録『達摩の禅法と思想及其他』pp. 112—114〕1936.

鈴木大拙　無心論及観門，及倫敦本S2669号長巻子〔『禅思想史研究』第2 pp. 216—218〕1951. ——尚これは後に『鈴木大拙全集』巻2 pp. 212—213 1968. として改訂出版。

柳田聖山　古本『六祖壇経』の課題〔『初期禅宗史書の研究』pp. 172—173〕1967.

〔略記〕本書は，1936年鈴木大拙氏が北京図書館所蔵の敦煌出土本中に発見された敦煌文献を集め，影印を『少室逸書』，校定と解説を『校刊少室逸書及解説』として出版された際，その附録とされた『達摩の禅法と思想及其他』の第2編に，禿氏祐祥氏の報告によって知ったという竜谷大学図書館蔵，敦煌出土長策子本『菩提達摩観門法大乗法論』の紹介と論考を発表された中で，はじめて関説されたものである。鈴木氏はその中で，特に「見性」や「行般若波羅蜜多」の語，及び定と慧の関係を日と光に譬える等の点に注目され，これらが『壇経』にみられることから，本書を慧能時代のものではないかと推論された。

その後鈴木氏は，1951年『禅思想史研究』第2を出版されるに当って，本書が「夫法性无言，仮言詮而顕理。」で始まることから，本書に「法性論」の擬題を与え，その巻末第7篇「敦煌出土本中，禅に関する文献七種につきて」の第2に本文の校定を掲げると共に，第2篇のS. 2669長巻子の解説の中で，本書について次のように述べられた。

「『法性論』の筆者を慧能頃の人と考えたい理由は，論中に「見性」の二字があり，また「頓教」を説くからである。併し慧能直系の人でないことは，「定慧等用」と云って定慧不二と云わぬところで判ぜられる。」とし，更に「少室逸書中では，即ち北京本では，「又涅槃経云」以下が寂和尚の偈と一処

になっているので，それも寂和尚のものとすれば，……（中略）……『法性論』の作者を寂和尚とするわけに行かぬかしらん。」との考えを述べられた。そして「この寂和尚が普寂であれば，神秀の弟子である。もし否ずして処寂であれば，彼は智侁（銑）の弟子で，また馬祖道一の落髪の師であった。」として普寂と処寂の二人の名を挙げ，最後に，「『法性論』はこうしてその帰著点を見付けられる。即ち神秀と慧能との対峙の外に又別派の思潮があったと云うことになるわけである。云々」と結ばれているのである。従って以上の論述からすれば，鈴木氏は本書の作者を寂和尚と結びつけ，しかも普寂よりは処寂の方に可能性が強いとみておられたのである。

その後本書に関説するものは永い間みられなかったが，1967年柳田聖山氏が『初期禅宗史書の研究』の出版に際して，古本『壇経』成立の問題を考究された際，本書の「見性」の内容の問題や，『仏頂経』の引用が他資料では『歴代法宝記』や『頓悟要門』が最も早いという成立時期の問題等をふまえて，「『法性論』を牛頭慧忠の作に擬し得る積極的な根拠はないが，頓悟や，見性や，即心即仏，無念，無心等の説が，単に慧能—神会系の独占ではなくて，寧ろ牛頭系統の特色を示すものであった云々」として，「見性」を説き『仏頂経』を引く本書が，慧能，神会系ではなくて，牛頭系の撰述ではないかを示唆された。

このように最初期の『壇経』との近似性からする慧能時代の成立説から，「見性」の内容が慧能，神会系ではないという見方に基ずく処寂説，更には「見性」の内容や「仏頂経」引用の時期的な問題からする牛頭系説等が出され，最終的結論には至っていないのが現状である。

26 無心論 釈菩提達摩製

①S. 5619

〔**移録**〕① 矢吹慶輝『鳴沙余韻』影印 pp. 77—78 I 1930.

① 『大正新脩大蔵経』巻85 pp. 1269a—1270a 1932. ——㊦

① 鈴木大拙『禅思想史研究』第2 pp. 221—224 1951. ——㊟——尚これは後に『鈴木大拙全集』巻2 pp. 216—219 1968. として改訂出版。

〔**訳註**〕① Suzuki, D. T. *Essays in Zen Buddhism second series* London 1933. 〔英訳〕

① 鈴木大拙『無心といふこと』pp. 87—95 1939. ——尚これは後に『鈴木大拙全集』巻7 pp. 166—171 1968. として改訂出版。

① Suzuki, D. T. *The Zen Doctorine of No-Mind* London 1949. 〔英訳〕

① 鈴木大拙『華厳の研究』1955. ——尚これは後に『鈴木大拙全集』

巻5 pp. 149—153 1968. として改訂出版。

①㊤㊟ 柳田聖山「菩提達摩無心論（無心に関する対話）」〔「世界の名著」続3『禅語録』pp. 79—91〕1974.

〔論文〕

矢吹慶輝 燉煌出土支那古禅史並に古禅籍関係文献に就いて〔『鳴沙余韻解説』pp. 533—536〕1933.

宇井伯寿 達摩の教説〔『禅宗史研究』p. 34〕1939.

鈴木大拙 絶観論；無心論及観門，及倫敦本S2669号長巻子〔『禅思想史研究』第2 pp. 162—190, 213—214〕1951.——尚これは後に『鈴木大拙全集』巻2 pp. 161—187, 209—210 1968. として改訂出版。

関口慈光（真大）無心論（燉煌出土）考〔『宗教文化』10〕1952.

関口真大 「菩提達摩無心論」と南宗禅〔『達摩大師の研究』pp. 186—212〕1957.

印 順 有関法融的作品〔『中国禅宗史』pp. 111—115〕1971.

柳田聖山 無心論〔「世界の名著」続3『禅語録』pp. 64—66〕1974.

〔略記〕本書は，弟子の問に和尚が答えるという対話形式により無心の法を論述したもので，形式内容共に『絶観論』の姉妹篇の如くにみられているものである。

最近柳田聖山氏が，中央公論社「世界の名著」シリーズの続3『禅語録』に禅の語録5種を選び，原文に分段を設け，各段毎に読み下し文，現代語訳，注，解説を加えるという綿密な労作を発表されたのであるが，その第1にとり上げられたのが本書である。尚その際に「禅の歴史と語録」と題する総論を述べられ，本書についても解題風に関説されているのでそれを参照していただきたい。

原本は今のところ①のみで，縦14.5cm，横10cm，の比較的厚い褐色紙3枚を真中で折って1帖12頁とし，2帖24頁からなる小冊子である。本書の後には神会の『頓悟無生般若頌』の前半が書写され，書体も整った善本である。1930年矢吹慶輝氏によって発見され，『鳴沙余韻』に写真が，また本文は1932年『大正蔵経』巻85に収められた。首題の「無心論一巻」の下に「釈菩提達摩製」とあるが，既に早く矢吹氏が「太上」を以って「如来」を解釈する点をはじめ，文体内容共に達摩の親撰ではなく，唐以後達摩に仮托したいわゆる達摩論の一類とされていたものである。ただ矢吹氏が本書をS. 296とされている点は，先の『壇経』と同じく仮番号によったとみられ訂正を要する。

ついで宇井伯寿氏も，簡単にではあるが矢吹氏とほぼ同一の理由で，本書が達摩のものかどうか疑わしいとされたのであるが，鈴木大拙氏は本書と『絶観論』との密接な関係をふまえ，『大正蔵経』本の校訂の不十分な点を補う意味で，『禅思想史研究』第2に『絶観論』に続いて新たな校訂を掲げると

共に，本書の内容上の問題について『絶観論』と併せて詳細に論じられ，その撰者については『無心論』『絶観論』共に菩提達摩の作であるという主張をされた。

これに対し，久野氏の主張した『絶観論』牛頭法融撰述説を支持強化する関口真大氏は，鈴木氏同様本書と『絶観論』の密接な関係をふまえ，両者を同一人の手になるものとの見地から，『絶観論』の撰者牛頭法融を同時に本書の撰者であると主張し，最近では印順氏もこの関口説を支持されている。

この両説に対して柳田聖山氏は，本書が達摩に仮托された達摩論であり，その達摩論の中では本書と『絶観論』が最もすぐれたものであるとしつつも，『絶観論』の牛頭法融撰述説に対しては，現在はすべて仮説の段階であるとし，本書の成立については『二入四行論』の趣旨にもとづいて作られ，それが後には逆にダルマ伝の一部として，『祖堂集』などにとり入れられてゆくものであり，その作者は僧肇の著作に通じていた人というのみで，慎重論に終始されている。

尚本書は，その無心の思想が禅の心髄を説くものとして早くから鈴木氏によって注目され，英文による禅の論考にもとりあげられ，今日では英訳のみならず独訳，仏訳も存する国際性豊かなものということである。

27　了性句并序　崇済寺禅師満和尚撰

①S. 3558　②S. 4064　③P. 3777　④裳67

〔**移録**〕④　許国霖『敦煌石室写経題記与敦煌雑録』下 pp. 88a—89a 1937.

①②　鈴木大拙『禅思想史研究』第2 pp. 477—479 1951. ——尚これは後に『鈴木大拙全集』巻2 pp. 450—452 1968. として改訂出版。

〔**論文**〕

鈴木大拙　敦煌出土本中，禅に関する文献七種につきて〔『禅思想史研究』第2 pp. 464—466〕1951. ——尚これは後に『鈴木大拙全集』巻2 pp. 438—440 1968. として改訂出版。

〔**略記**〕本書は，序文と七言134句の韻文からなり，崇済寺禅師満和尚の撰とされるが，この人物の為人は今日尚明らかでない。1937年許国霖氏が『敦煌石室写経題記与敦煌雑録』の下輯に，北京本の④を活字にされていたのであるが，この書物自体を我々が知るようになったのは，比較的新しいことで，スタイン本の①②を対校された鈴木大拙氏も，北京本についてはまったく触れられていない。更にペリオ本の③についても，その存在が知られるようになったのは，1962年北京の商務印書館から発行された『敦煌遺書総目索引』以後のことであり，井ノ口泰淳氏将来のマイクロフィルムによって，はじめてその内容の知られたものである。

かくして長いプロセスを経て，今日4種の異本の存在が知られるに至ったのであるが，従来「了性句并序」という首題の下の撰者名が「崇済寺禅師」まではわかっていたが，以下が破損のために不明で，鈴木氏の言を借りれば，「次の字は僅かにその頭部を残して居て，さんずいとくさかんむりの一部を読み得るようであるが，その余は全く無し。」という如くであった。それが③の出現によって，以下「満和尚撰」であることが明らかになったものである。

このような次第で，本書に関しては従来ほとんど論究されておらず，鈴木氏が①②の校定を『禅思想史研究』第2の第7篇「敦煌出土本中，禅に関する文献七種につきて」の第5に掲げるに際して解説されたものがあるのみである。それによれば，「内容を注意して読んで見ると，どうも慧能以前のものかと思われる。或は北宗系に属するものかも知れぬ。序文に楞伽経の引文あること，及び法性浄を説いて明鏡在塵の喩から，「揩，拭還門」を述ぶるところあたりは，弘忍門下で神秀系を汲むものの思想である。」とし，更に本文中「看」を強調し，「不動不起」を教える点を挙げて，これを北宗系のものと推論されている。

この「看」の強調で思い起されるのは，敦煌出土の『恵達和上頓教大乗秘密心契禅門法』である。これも恵達の為人が確定していない現在明確な位置づけは不可能であるが，近年これが北宗禅と密教との交渉裡に出現したものではないか，とする見方がある。両者の「看」についての所説をみると，『了性句』では，「各各勤レ 功向レ 理看。看裏無レ 看看正看。看中不レ 見同レ 無レ 物。不レ 応二 看外更求一レ 看。」といい，『禅門法』では，「心来無二 所処一。尽レ 意看更看。看看看不レ 絶。是名二 無漏智一。」とある。共に看に徹すべきことを説いたものである。恵達和上同様崇済寺禅師満和尚の為人がまったく不明な現在，本書の位置づけも不可能であるが，序文，本文を通じて随所に如来蔵思想に立脚した説示がみられるところからすれば，如来蔵思想を背景とした北宗禅系のものではないかと考えられる。

28　梁武帝問志公和尚如何修道

①S. 3177　②P. 3641

〔移録〕①　矢吹慶輝『鳴沙余韻』影印 p. 78 Ⅲ 1930.

〔論文〕

矢吹慶輝　「梁武問志公」（擬題）〔『鳴沙余韻解説』pp. 209—210〕1933.

柳田聖山　伝法宝紀とその作者——ペリオ3559号をめぐる北宗禅研究資料の札記 その Ⅰ 〔『禅学研究』53〕1963.

〔略記〕本書は，梁の武帝が志公すなわち宝誌（保誌）に修道の如何なるかを問

い，志公が偈でもって答えたという形態をとっており，矢吹慶輝氏はこれを歴史的事実の如くみておられるが，実際は武帝と宝誌の二人に仮托したものである。

柳田聖山氏によれば，本書と同巧異曲のものに，「志公薬方」と題するものが『禅門諸祖師偈頌』巻2にあり，本書はその末尾に連なるものではないかとされているが，まさしく本書は「志公薬方」後半の「武帝又問。如何得成仏。」以下とほぼ同一内容のものである。また宝誌と同時代に活躍した禅者で，達摩と並び称せられる僧稠に仮托した同一手法になる『稠禅師薬方療有漏』と題するものが，『伝法宝紀』の完本を含む北宗禅資料を総集したP. 3559に存在することから，本書も北宗禅系の人によって『稠禅師薬方療有漏』と相前後して生み出されたものと考えられる。

29 絶観論〔三蔵法師菩提達摩絶観論，達摩和尚絶観論，入理縁門論，菩薩心境相融一合論，観行法為有縁無名上士集〕

①P. 2045　②P. 2074　③P. 2732　④P. 2885　⑤閏84　⑥石井光雄氏旧蔵本

〔**移録**〕⑤　鈴木貞太郎（大拙）『少室逸書』影印　pp. 57—70 1935.

⑤　鈴木貞太郎（大拙）『校刊少室逸書及解説』pp. 73—86 1936. ——尚これは後に『禅思想史研究』第2 pp. 204—212 1951. として，更に『鈴木大拙全集』巻2 pp. 201—209 1968. として改訂出版。

②③④　久野芳隆「流動性に富む唐代禅宗典籍——燉煌出土本に於ける南禅北宗の代表的作品——」〔『宗教研究』新14—1 pp. 136—144〕1937. ——尚これは後に「牛頭法融に及ぼせる三論宗の影響——敦煌出土本を中心として」〔『仏教研究』3—6 pp. 63—71〕1939. 中に改訂出版。

②③④　鈴木大拙「敦煌出土達摩和尚絶観論につきて」〔『仏教研究』1—1 pp. 57—68〕1937.

⑤⑥　鈴木大拙編，古田紹欽校『燉煌出土積翠軒本絶観論』pp. 1—37〕1945.

②③④⑥　鈴木大拙『禅思想史研究』第2 pp. 190—204 1951. ——尚これは後に『鈴木大拙全集』巻2 pp. 188—201 1968. として改訂出版。

①②③④⑤⑥　柳田聖山「絶観論の本文研究」〔『禅学研究』58 pp. 79—124〕1970.

〔**論文**〕

鈴木貞太郎（大拙）「観行法　無名上士集」〔『少室逸書解説』pp. 69—70〕1936.

久野芳隆　流動性に富む唐代の禅宗典籍——燉煌出土本に於ける南禅北宗の代表的作品——〔『宗教研究』新14—1〕1937.

鈴木大拙　敦煌出土達摩和尚絶観論につきて〔『仏教研究』1—1〕1937.
久野芳隆　牛頭法融に及ぼせる三論宗の影響—敦煌出土本を中心として〔『仏教研究』3—6〕1939.
宇井伯寿　法融の弟子及び著述〔『禅宗史研究』pp. 117—118〕1939.
関口慈光（真大）　絶観論（敦煌出土）撰者考〔『大正大学学報』30, 31合輯〕1940.
鈴木大拙編・古田紹欽校　燉煌出土積翠軒本絶観論解題〔『燉煌出土積翠軒本絶観論』pp. 1—7〕1945.
関口慈光（真大）　燉煌出土「絶観論」小考—牛頭禅研究の新資料として〔『天台宗教学研究所報』1〕1951.
関口真大　達摩和尚絶観論（燉煌出土）は牛頭法融の撰述たるを論ず〔『印度学仏教学研究』5—1〕1957.
関口真大「達摩和尚絶観論」と牛頭禅〔『達摩大師の研究』pp. 82—185〕1957.
中川　孝　絶観論考〔『印度学仏教学研究』7—2〕1959.
柳田聖山　絶観論の本文研究〔『禅学研究』58〕1970.
印　順　有関法融的作品〔『中国禅宗史』pp. 111—115〕1971.

〔**略記**〕本書は，入理先生と弟子縁門による対話形式により，絶観の法を論究した長篇で，形式内容共に『無心論』と極めて密接な関係にあるとみられ，現在までに6種の異本の存在が知られている。それらが発見された次第，従来の本文紹介，研究の状況等については，近年柳田聖山氏の論文「絶観論の本文研究」の冒頭及び「世界古典文学全集」36B『禅家語録』Ⅱの付録「禅籍解題」中に詳述されているので，それらを参照していただきたい。

異本6本の内，最初に発見紹介されたのは，1935年鈴木大拙氏の出版になる北京本の⑤で，「観行法為有縁無名上士集」の尾題を有する一本である。鈴木氏は，これを神会の弟子無名が神会に問うた「観行法」を集めたもの，従ってこの「観行法」なるものは，荷沢神会の禅法を述べたものとされた。しかしその翌年，久野芳隆氏が，パリでペリオ本の3種，すなわち「絶観論」の首題の下に「菩薩心境相融一合論」の別名を付した未完の②，「入理縁門一巻」の首題，「縁門論一巻」の「縁門」を朱で「絶観」と訂正した尾題を有する③，「達摩和尚絶観論一巻」の尾題を有し，「辛巳年三月六日写記，僧法成」の奥付を有する④を発見され，それらを合わせて本文を定め，紹介と解説を付して発表すると，鈴木氏もこれとほぼ同時に，久野氏発見の3本の新たな校合を発表された。その後久野氏はあらためて前掲3本の校合をなした上，作者を菩提達摩ではなく，牛頭法融であるという主張をなし，宇井伯寿氏も『宗鏡録』巻97の「牛頭融大師絶観論」の引文によって，久野氏同様本書を牛頭法融の撰述とされた。

一方鈴木氏は，古田紹欽氏と共に，石井本⑥の写真及びそれと⑤の北京本との対校を出版し，作者については菩提達摩であると主張された。こうして鈴木氏は当初の荷沢神会説を変えて菩提達摩説を主張する一方で，久野氏，宇井氏は牛頭法融説を主張し，両説相並行したまま問題を已後に遺していたのである。

その後この作者問題は，関口真大氏によって意欲的にとりくまれた。すなわち1940年の「絶観論（敦煌出土）撰者考」に始まる数種の論考は，牛頭法融の撰述とする久野説を更に一層強化発展させたものであり，最近では印順氏も関口説を支持されているが，それでも尚一方には鈴木説を支持する中川孝氏の論考も出され，近作の柳田聖山氏の論文でも，この作者問題については，「今日のところ，すべてが仮説の域を出でない。」として，更に検討の余地の十分あることを述べられている。

このように，従来本書の研究の焦点がその撰者問題に終始した点の反省をふまえ，新たに「三蔵法師菩提達摩絶観論」の首題，「観行法為有縁無名上士集」の尾題を有する善本①の存在を知られた柳田氏が，従来出現した6種の異本すべてを詳細に比較校合し，これら6種の異本に3段階の発展があったとする新説を出された。それによれば，「入理縁門一巻」を首題とする③⑥を第1段階，首題に達摩の名を付し，尾題を「観行法為有縁無名上士集」とする①⑤を第2段階，「絶観論」の首題の下に「菩薩心境相融一合論」の別名を加え，尾題を「達摩和尚絶観論」とする②④を第3段階として，これら3系統の本文を対照し，新たな資料提供をされたのがごく最近の研究成果である。

こうして撰者の問題をのこしながら，本文研究の新しい成果が発表された現在，それらの基盤の上に本書の総合的研究がまたれているというのが現状である。尚柳田氏の論文中に，「ペリオ第2732号の末尾には，貞元甲戌の年号と，甘州大寧寺で落蕃僧懐生が校訂したというコロホンのあることを，鈴木大拙先生が報ぜられてから，すべての学者が不用意にこれを信じているが，今手許に揃っている写真による限り，このことはすこぶる確かでない。おそらくは，他の資料のコロホンであろう。」との指摘があるが，このコロホンが朱書きされたために，マイクロフィルムの写真には出なかったものであり，コロホンそのものは確かに存在するのである。ただ鈴木氏が報ぜられた通りのコロホンかというと，そこには疑問もあり，この問題については今後の課題として検討が必要である。

後　　記

本号をもって「敦煌禅宗資料分類目録初稿」のⅡ禅法・修道論をとにかく完了

した。Ⅰ伝燈・嗣承論７項目を本紀要27号に発表したのは昭和44年（1969）のことであり，その後Ⅱ禅法・修道論は全部で29項目の多きにのぼったために，前後３回に分け，昭和46年（1971）の29号に〔１〕として５項目，昭和49年（1974）の32号に〔２〕として14項目，そして今回の昭和51年（1976）の34号に〔３〕として残り10項目をとりあげた次第である。本来ならば毎年の紀要に連続して発表すべき性質のものでありながら，第１回の昭和44年からすると今回の第４回までに既に７年もの歳月を費してしまった。しかしその間昭和47年（1972）には，特に海外留学の機会を与えられ，３月から６月までの４ケ月間ロンドン大英博物館，７月から９月までの３ケ月間パリ国民図書館にて，スタイン，ペリオ両コレクションの禅宗文献を直接手にして調査することができたことは，この仕事を進める上にも大きなプラスになった。

そもそもこの目録を作成するに当っては，昭和44年（1969）『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第１号に発表した「敦煌禅宗資料項目別一覧」を基準としたが，この一覧は分類項目として，Ⅰ伝燈・嗣承論，Ⅱ禅法・修道論，Ⅲ銘・箴・讃・偈類，Ⅳ教理問答・綱要書，Ⅴ経注・経序類，Ⅵ偽作経論類の９種をたて，それぞれの文献を内容によって分類し，各項目ごとに標題のアイウエオ順に配列したものである。この分類は従来知られた各コレクションの目録類から禅宗文献を抜き出して分類配列したものであり，決して十分なものではなく，訂正すべき点もかなりあったが，これを作成しておいたことは，実地調査をする際に大いに役立った。

かくして今回で６項目中Ⅰ，Ⅱの２項目を完了したが，尚ⅢからⅥまでの４項目が残ることになる。今後残りの部分を完結させなければならないが，本紀要への発表は今回で終りとしたい。それは禅宗史の中心テーマが，伝燈論と修道論にあるとみる私自身の見解によるものであって，この二本柱がⅠ，Ⅱの完了によって不十分ながら果されたと考えるからである。だからといってⅢ以降を無視していいということではない。今後別の方法で従来の訂正と已後の成果を発表したいと考えている。

ところでⅠは「一覧」に掲げた通りの文献を扱ったが，Ⅱではかなりの変更を余儀なくされた。それは前述の如き訂正を要する問題が数多く出現したためでもある。「一覧」にありながらとりあげなかったものに，『受菩薩戒儀』『除睡呪』『頓悟大乗正理決』『頓入大乗義門』があるが，『受菩薩戒儀』は儀軌であって必ずしも禅宗文献ではなく，『除睡呪』は密教文献であり，呪文とすればⅢに入れるべきもの，『正理決』はチベットにおける中国僧摩訶衍とインド僧カマラシーラの頓漸についての宗論の記録であり，その後の宗論の記録である『大乗二十二問』と同じく教理問答としてⅣに入れるべきもの，『大乗義門』はチベット文献であるという理由によるものである。一方新たに採用したものは，『先徳集於雙

峰山塔各談玄理十二』『大潙警策』『稠禅師意』『稠禅師薬方療有漏』の4種で，これらはそれぞれ内容的にⅡに入れるのが適切であろうと考えたからである。今一つ『大乗五方便』と『大乗無生方便門』は，鈴木大拙氏の『禅思想史研究』第3にもみられるように，同一ソースから出た異本とみるべきであり，『大乗五方便』に一括してとり扱った。従って全体では30種から1種減って，29種となったのである。

また配列はアイウエオ順としたが，『天竹国菩提達摩禅師論』と『稠禅師薬方療有漏』が逆になり，『修行大乗最上法』を『修行最上大乗法』，『禅策十道』を『請二和上答禅策十道』と改めたのは，順序としては問題ないが，『菩提達摩絶観論』を『絶観論』と改める必要を生じたために，これだけは配列順序に合わせることができず，やむなく補遺の形で末尾に入れざるを得なかった。

私のこの仕事が遅々としている間に，これら敦煌禅宗文献を含む中国禅籍の総合的解題が，柳田聖山氏により「禅籍解題」として筑摩書房刊「世界古典文学全集」36B『禅家語録』Ⅱの巻末に付録として掲載された。これは全部で329種にものぼる厖大な数の禅籍を1目録，2資料，3叢書，4敦煌の禅籍，5唐代の禅籍，6宋代の禅籍，7元明以降の禅籍，8朝鮮で出版された中国の禅籍その他，9補遺の9項目に分けて解説されたもので，後学にとって極めて有益なご労作である。私が扱った文献は，この内の3叢書と4敦煌の禅籍のかなりの部分，並びに5唐代の禅籍若干に及ぶものであったが，大いにその恩恵に浴したものである。ここに記してその学恩に深く感謝の意を表すると共に，今後より正確な目録にしていくためにも，各位のご教示をお願いする次第である。